

第三部：世界へ「物・事・考え」を 誤解なく伝えるための「平明日本語」

1.日本人は、第二母語としての「オープン・ジャパニーズ」が必要

どうやらわかってきたが、われわれ日本人は、英語を学習する前に、物事を論理的に記述するために、第2母語としての日本語「文明日本語」を持つ必要がある。この言語を、篠原先輩は「オープン・ジャパニーズ」と呼んでいる。

ロジカルに物事をつきつめ、それをロジカルに表現する訓練がされていないのに、ロジカルな英語を勉強しろと迫られても、それは無理とおもう。頭の中でロジカルな適応力が育っていないところに、外国の言語を身につけろと迫られることは、二重の苦難を強いられることになる。

そのため、結果としては、英語も身につかず、母語である日本語で論理的に表現することができない「日本人」が増え続ける。英語を学習するときに、なぜそのような表現方法をとるのか、なぜそのような言い方をするのかを、論理的というテーマを抜きにして理解することはほとんど不可能であろう。

なぜ英語を学習するのが必要かといえ、一つは世界の情報を入手するためであり、一つは事実と当方の考えを世界の人に伝えるための道具として使いこなす必要があるからだ。世界の人々と相互に事実と知恵を交換する必要がある事項は、自然に関することと社会に関することである。シェクスピアの価値や芭蕉の意義を論じるためではない。したがって、アングロ・サクソンの文化、つまり英国・米国の文化と切り離された、「オープン・イングリッシュ」を学習すればいいことになる。

その Open English を学習するためには、その前に、日本語でロジカルに考え、ロジカルに表現する学習(訓練)しておく必要がある。あるいは平行して学習を続ける必要がある。世界に誇るに足る我々の日本語、優美な日本語は、そのままではロジカルな展開には適していない。侘び(わび)・寂び(さび)、粹(いき)と粋(すい)を表現するのに適した言語で、同時に論理的表現にも適していることを求めるのは、無理である。

では、世界の人々と世界の中の普遍的事項を伝え合い、知恵を交換するにはどうす

ればよいのか。答えは簡単で、論理的思考と論理的表現に適した日本語を身につければいいことになる。これは母語であるから、誰でも学ぶことができ、容易に身につけることができる。これが第2母語としての日本語、(Open Japanese)である。日本語でそれが可能か。答えは「可」である。間違いなく実現できる。

論理思考と論理的表現に適した第2母語としての日本語で文書を論理的に明確に記述することができれば、その文書は、英語(だけでなくその他の欧州言語も含め)と「互換性 compatibility」がとれている。つまり世界の中でのドキュメントとして、どこにでも伝わる互換性を持っている存在になる。もちろん、その文書が英語に訳されている必要があるが、元の文書がロジカルに明快に日本語で書かれていれば、それを正確に英語に転換してくれる英語の達人はたくさんいるし、機械翻訳ソフトでも相当レベルまでやってくれる。

論理的文書を構築するためには、二つの要素が欠かせない。ひとつは、論理的に「文書」を展開、構成することであり、もう一つは明快な「文章」を記述することである。研究レポートとか仕様書は、一つの生産物であるから、人様に読んでいただくには、それなりの作法があり、その作法が論理的に構成、展開された文書というものである。

さらに、作法の前に、「心」が必要である。自分の生産物を他者に読んでいただくためにはどうすればよいか、相手の立場や気持ちを思いやる心がなければ、論理的に明快な文書は作れない。つまり論理以前に、思いやりの「心」が必要ということだ。この「心」があれば、論理的で明快な文書を構築する作業の半分は成功したと見做していいだろう。人が人を取り巻く自然環境、人がこしらえ運営している社会、これらの対象について学ぶのに、人は言語を道具として用いる。従って用いる言語が持つフィルターを通して物事を見、分析し、対策を考えていることになる。何語を使っているかで各人それぞれのズレが生じる。

国語の力が学校で習う全教科に大きく作用するのは、言語をとおして学習しているからであり、同時にそれらの教科、例えば算数とか理科を学ぶことで、国語の力が向上していく。今はどうなったか知らないが、昔は日本人の算数力は世界一と言われていた。考えて見るに、算数で使われる日本語はきわめて合理的でわかりやすくできている。足す、引く、掛ける、割るという大和言葉の動詞で4則が成り立っているのは有難い話だ。分数においても3分の2は3つに「分けた」内の2つだから、これもわかりやすい。インドの人やハンガリーの人が数学に強いのは言語が味方しているのではなからうか。(篠原レポートから引用 2006/06/10)

2.日本の英語学習指導は根本的に間違っているのでは？

さて、英語学習指導の話であるが、日本の英語学習指導で根本的に誤っているのは、これを言語として学習させていることにあるのではないか。

人が生きていく上で必要な言語、つまり母語と同じ扱いで、英語を言語として学習させることは、基本的に無理である。中学から高校までの英語学習の時間を合計してみるだけで、そんなことは無理であることは明確である。

言語は、自分という存在を含めて、世界を眺めるための道具である。従って母語以外の外国語を習得することは、母語とは違った角度で世界を眺めることができるようになることを意味する。政治面から世界を眺める、経済から見る、自然科学から、工業技術などから一味違う眺め方ができるようになる。

ということで、学校で教える英語は、世界を眺めるための道具として扱うのがよいのではないかと思う。例えば「理科」は自然科学の分野であり、この分野は文化としての言語の影響を最も受けにくいところだから、いっそ理科を英語で学んでみてはどうだろうか。

自然科学のほとんどは欧州から学んだやり方、なのだから英語で学んでも日本人の「大和魂」に悪い影響は与えないと思われる。実際、理科や化学は英語で学んだ方がずっとスッキリするのではないか。本家で発達した学問分野だから、そこで使われている言語の方が表現において適性をもっていることは当たり前である。

例えば、理科の英語なら「未来完了形」は出てこないし、それどころかほとんどの文章は現在形だから、文法の「時制」に悩まされるといった、ややこしいことはない。英語を母語とする人が使う文化言語や熟語なども出てこないから、アメリカ文化、イギリス文化を知らなくとも、まったく問題ない。

英語で表現する力はどうなるか。答えは簡単で、国語でまともな表現ができるようになるまで、英語で表現するとい大それたことはやらしてはならない。箸も満足に使えないのにナイフとフォークの作法を教えるはいけない。言語としての英語による表現は、母語である日本語でまともに表現できるようになった人から、その学習課程に入るべきだろう。

学校の英語授業は、言語として教えるのではなく、世界を眺める道具の一つとして、眺め方の学習の中での道具として扱えるようにするだけでいいのではないだろうか。例えば、英語と理科の時間を合体するのも一つの方法かも？

「英語で書かれた文書を読んだり、英語で文書を作成したりすることができる能力を身につけることがなぜ必要か。母語である日本語での表現力、特に論理的に明確に表現する能力を向上させる上で、大きな支援となるからだ」。

繰り返し整理すると、日本人には英語学習はまことに難しい。なぜならば、日本語で論理的に、明確に、断定的に表現する訓練を、われわれは受けていないからである。

対象物(者)に関して自分の情感を表すことを主とする「文化日本語」と、対象物に関して論理的に明確に表現することを主とする英語の間には、深い溝がある。二つの言語の間に深い溝がある事を知らないまま、英語教育は行われ、今も行われている。

この溝を埋めるものは何か。技術や社会システムなど、世界の普遍事項を表現するための日本語である。つまり世界に開かれた「オープンな日本語」がその溝を埋める唯一の橋となる。この橋を架けずに、深く幅広い溝の存在を無視したままいくら英語教育を続けても変わるはずがない。

世界の人に向けて、世界の普遍事項に関して日本語で語るにはどうすればよいか。それを考えることで、英語の姿が見えてくる。英語の表現方法を、利用できる場所は利用する手立てが頭の中で生まれてくる。

近代、あるいは現在、国(アメリカとかインドとか)を異にする人々と通じ合うためには、母語を脇に置いて、謡曲の日本語、浄瑠璃の日本語に代わる「オープンな日本語」で語る必要がある。相手の語ることを理解するためには、文化としての英語ではなく、世界共通手段としての英語で理解することが必要である。

- (1) 英語学習には、「文化日本語」と論理的英語の溝を埋める橋渡しが必要である
- (2) その橋渡しは「オープンな日本語」という存在である
- (3) オープンな日本語を構築していくには英語を知ることが大いに役立つ
- (4) 英語でどのように表現しているかを知ることは、グローバル言語である英語を、理解できる力となる。(篠原レポートから引用: 2006/07/20)

3.平明で「やさしい日本語」運動に関する情報が多くなってきた

私は、新聞や雑誌などで、伝わる「やさしい日本語」に関連する新聞記事や論説を切り取って、「SCRAP Book」へ保存している。もう3冊目で、関連する情報が意外と多いことに嬉しさを感じている。「やさしい日本語」の必要性が認識されたのは1995年の阪神大震災がキッカケとなったようだ。SCRAP記事の内容を簡単に書き出してみる。

・1995年の阪神大震災がきっかけ:

優しい日本語を使った避難の呼びかけや、防災マップづくりは日本全国自治体に広がっている。政府が決めた災害時の情報伝達に関するガイドラインによれば、「やさしい日本語」を必要としていることを述べているが、実情は自治体まかせ。「いま何が起きているのか、何をしなければならないのか」を「やさしい日本語」で指示して欲しい。

・外国人にも伝わりやすい「やさしい日本語」を医療現場にも広めよう:

医療現場で日本語が不慣れな外国人にもわかりやすい「やさしい日本語」を普及させる取り組みが始まっている。問診、検査、処方箋などについて伝わる言い方を現場で試みしている。「やさしい日本語」の活用を目指している医療機関は徐々に増えている。例えば、嚙下って読めますか？。

・朝日新聞 コラム:やさしい日本語 1~5(2019/07/01~2019/07/05):

「外国人＝英語」じゃない/「安静に」より「走らないで」/72時間 命繋ぐ言葉たち
役所は「わかりやすい」が苦手/学校のお知らせも「優しく」

・朝日新聞 オピニオン&フォーラム 声 Voice: から投稿タイトルを抜粋

- ・受験で英語力を問う意味があるのか(無職)
- ・やさしい日本語、政府が率先して(契約社員)
- ・平易な日本語は、日本人にも必要(パート)
- ・発信は「平明な日本語」で、(元 商社会社)
- ・AI進歩、なぜいつまでの英語?(高校非常勤講師)
- ・高校の英語、文法より実用重視を(高校生)
- ・やさしい日本語で優しい社会に(社団法人研究員)
- ・どう思いますか、AI時代の語学:2023/9/6 声 Voice からの問いかけ
- ・英語は、美術や音楽のような科目になる(日本語講師)
- ・便利さにおぼれずに 学習に工夫を(高校生)
- ・分断した世界 超えるのは言葉(主婦)

福沢諭吉:超訳! 学問のすすめ

週刊ダイヤモンド 2018/12/22

日本国家を近代化へ導いたと評されている「福沢諭吉」は、長崎でオランダ語を学び、大阪の適塾(緒方洪庵)で蘭学を猛勉強して中津藩江戸屋敷の蘭学塾を開いていた。ペリー来航後、条約が結ばれ日本の17世紀以来の鎖国政策が終わった時期と重なった。

そんななか、諭吉は横浜で大きな衝撃を受けた。“オランダ語が使えない、今は英語なのか”と落胆した。しかし諭吉は、滅入ること無く英語を話せる人を江戸中探しながら、英語からオランダ語への翻訳に挑戦をしたそう。そして、英語の構造はオランダ語と似ていることに気づいた。さらに猛勉強を重ねた。そのことで後、幕府が派遣する軍艦咸臨丸でアメリカへ行けるチャンスをつかんだという。諭吉はこの時を含めアメリカ2回、欧州1回、随行する幸運に会えた。

生誕100年司馬遼太郎の現在地

司馬遼太郎インタビュー文科勲章受章発表の夜
朝日新聞社出版 2023年4月10日発行

この書籍の中で、司馬遼太郎さんが大阪外語大額で、モンゴル語を選んだ理由は、モンゴル語と日本語は言語構造が似ているからだと言われている。なるほど、モンゴル出身のお相撲さんが日本語を流暢に話せる理由が分かった。司馬遼太郎さんは、日本語と英語の文章構造が違いすぎるのが日本人の英語苦手を生みだしていること、そして日本の子供達への英語教育の在り方について心配されていた。

原文引用:

『日本人がモンゴル語をやるということは、フランス人が英語やドイツ語をやると言うことなんですね。(中略)ところが日本の少年は全然言語構造が違う英語をやったり、中国語を習ったりしています。これはもう毎日逆立ちをしているようなものです。(中略)少年期に全く構造の違う英語を習わせて、生涯の後々まで国になっている』。

4.理科系の作文技術 木下是雄先生の教えから学ぶ

【書籍】:『理科系の作文技術(中央公書)』

井上ひさし(故人)さんの著作、日本語教室(新潮新書)の中で、木下是雄先生(当時、学習院大学理学部教授)が書かれた『理科系の作文技術(中央公書)』について“素晴らしい御本だ”と紹介しています。↓

この『理科系の作文技術(中央公書:初版 1981年9月25日)』が、2024年2月5日に増版(92版)されています。欧米語とは、日本語とは一体どんな言語なのか、興味ある人にお勧めの書籍です。私には、人様を説得できるだけの学識と経験が全くありません。木下是雄先生は、実際に学生たちへ指導してきた経験を基にして述べられているので“いちいちご尤も”説得力があります。

木下先生は、この書籍の中で、理論物理学者のレゲットが日本語について述べていることを紹介されています。↓

引用:『日本語では、いくつかのことを書き並べるとき、その内容や相互の関連がパラグラフ全体を読んだ後ではじめてわかる。—極端な場合は文章を全部読み終わってはじめてわかる—という書き方が日本では許されているらしい。英語ではこれは許されない。一つ一つの文は、読者がそこまで読んだことだけによって理解できるように書かかなければならないのである』と。p76

つまり英語では読者が想像力を働かせながら、あるいは補って読んでくれるということとはとはあり得ない。そして、木下先生は、さらに明言を避けたがる心理を持つ日本人と西欧人との差についても次のように、わかりやすく簡潔に述べられています。

引用:『日本人は、はっきりしすぎた言い方、断定的な言い方をさけようとする傾向が非常に強い。たぶん、「ほかにも可能性があることを無視して自分の意見を読者に押し付けるのは図々しい」という遠慮ぶかい考え方のためだろう。ところがこれは、欧米の読者の大部分にとっては、思いもつかぬ考え方である。この日本式のゆかしさを解するには自分たちの普段の考え方をスッパリ切り替えてかかるほかないが、それは、たいていの欧米の読者にはできない相談だ』。p90

さらに、西欧の文明は極めて独特で、その文明をそれ以外の世界へ共用してきた唯一の文明であることも触れています。

引用:『日本と西欧との文化の差に根差す深い溝である。私はそれぞれの社会の中で生き抜いていくための知恵が、長年のあいだに、必然的に、ものの言い方を、それぞれの型にはめてしまったものだと思う。欧州は、古来、多くの民族がせめぎあって栄華盛衰を繰り返し、今もその跡が刻まれている土地である。一つの国にいくつかの民族が道教している例は珍しくない(中略)』

異なった歴史を背負い、異なったことばを話す人たちの交流はむずかしい。複雑・歪曲の言い回しは、しばしば誤解を招く。相手の共感を呼ぼうとしてかえって怒らせることも少なくない。いきおい、交渉のしかたは、自己の主張を徹底させることを第一に、くどいほど隔々まで明確に、ということになろう。欧州にそういうものの言い方を発達させたもう一つの原因として私が考えるのは、欧州の社会は契約社会、契約を土台として成り立っている社会ということだ』。p92

そして理科系の作文技術について、学生たちへ次のように指導されています。

- 1) 曖昧を残さずに明確に書くこと、ぼやかして書くことは許されない。必要なことは漏れなく記述し、必要でないことは一つも書かない。
- 2) 明快・簡潔な文章の要件は、論理の流れがはっきりしており、一つの文と文との結びつき方が明瞭なこと。主張が先にある、それを裏付けする材料を探すなどということはありません。
- 3) 一義的に読めるか、他の意味にとられる心配はないか、はっきり言えることはズバリと言い切る、ぼかした表現はさける。なるべく短い文で文章を構成する。
- 4) つまり、理科系の作文技術には「人の心を打つ」「琴線にふれる」「心を高揚させる」「うっとりさせる」というような性格が一切無視されていることである。

5. 普遍性ある世界共通の技術説明は「文明言語」で行われる

我々日本人は、文化を同じくするもの同士であれば、情報の意思の交換に何ら支障もない言語を手に入れている。他言語のそれを日本語に転換する上での柔軟性も十分に持った言語を母語として享受している。

しかし、一方において世界の人々を相手として意識したときに、誰にでも理解できる平明な普遍的表現で、ということを我々日本人は意識してきたであろうか？残念ながら否である。しかし日本語は、極めて柔軟性の高い言語で、技術を論理的に表現することは可能だと思う。

技術は、普遍性のあるものであるから、それを記述するには、文化的な要素はできるだけ排除されている。つまり、米国の技術論文を読む上で、アメリカ文化は、知らなくても良い。従って、これは「オープン・イングリッシュ」とみなすことができる。

技術は、その原理、法則を頭で理解することができれば民族、文化の違いに関係なく人類の誰もが修得できる。つまり普遍性があり、その意味で「文明言語」と言える。

世界の共通言語であると言われている英語は、開かれた国際言語として標準性・普遍性が高く、好むと好まざるに関係なく、一つの文明と言えるほどのものになっている。英語が一つの文明であるならば、標準性、普遍性は日々強まって行く。

それは、英語を学ぶ意欲さえあれば人類の誰もが理解しやすく修得しやすい言語構造になっていることを意味する。もちろん一つの言語であるから、どこまで行ってもその文化の根っこは消えないが、意思疎通の手段として使う人の数が、増え続ける限り、文化の香りはどんどん消えていく。

そのような状況の中で、言語構造(体系)が明確な英語は、標準性・普遍性・開放性を高めて行くことは間違いのない事実である。

確かに、日本語は論理的に厳密に記述するには適さない言語であるという事実も無視できない。しかし、このことは日本語で論理的に記述することが出来ないと言うことでない。つまり言語の弱点(特徴)を強く認識して、それを克服していく努力・教育がなされて来なかっただけだと思う。

例えば科学技術の世界において、電気の流れは民族と文化に関係なく、何処においても同じ原理で流れる。どれくらいの容量の電気が何処で生まれ、何を通して、何処から何処へどのようなタイミングで、何のために流されているのかは、英語でも日本語でも正確に同じに記述できる。

違いは、使われる文字と記述の順序と言葉(単語)だけであり、これらは問題なく夫々の言語に転換できるはずである。日本語を他言語へ翻訳する場合も、普遍的である文明の言語、即ち「[文明日本語](#)」で論理的に明快に記述されていれば、異なる言語の間での翻訳は、比較的容易な作業となる。

目の前に一つの製品、例えば複写機が置かれているとする。この製品を囲んでいる、アメリカ人(イギリス人)、ドイツ人、フランス人、日本人の技術者に対して、それぞれの母語で、この製品は何であるか、記述して説明せよとの課題が出されたとする。どこの国の技術者が一番かはわからないが、間違いなく言えるのは、日本人技術者のレポートが最も、わかりにくいという結果になると思う。

なぜだろうか。一言で言えば、日本の技術者は、文章で論理的に事実を説明する訓練を受けていないからである。学校においても、会社に入ってから、論理的に正確に、明快に記述する訓練は行なわれていない。そもそも、そのような先生が居るのかも怪しい。学校から企業研修まで、教育という面において、論理的に記述することの重要性は、課題として認識されていないと思われる。

日本人の特性として、図形で表現することには長けているから、先の課題に対しても、構造図のスケッチを添付せよと言われれば、間違いなく日本人技術者のそれが最優秀であろう。一方、欧米の技術者、また技術に限らず企業のエリートは、事実の報告や企画提案において、グラフィックで説明することは苦手であり、その代わりにテキスト(文章)で、とどまることを知らぬげに、猛烈に書いてくる。日本人が[グラフィック人間](#)であるとするなら、彼ら欧米人は[テキスト人間](#)と言えようか。

この違いは、論理的に表現する必要性に対する認識の薄さと、その結果として出てくる、表現方法の錬度を高める努力の欠如が上げられるだろう。明治・大正期に、西欧近代社会に追いつくために、必死に日本語改革に取り組んできた先駆者の意図と努力は、昭和期に入って忘れ去られ、世界に通用する、すなわち簡単に英語やその他の外国語に転換できる、つまり同じ土俵の上で展開される平明な「やさしい日本語」を作り上げる必要性は意識されなかったからだと思う。[いつまでもこのまま放置しておくことは日本の国力を下げることになる。](#)

—篠原ブログ(99) 八代海軍大将、あるいは明治期の仕様書—

司馬遼太郎さんの「ある運命について」(中公文庫)を読み直して、以前は読み飛ばしていた箇所に目がとまった。「文学としての登場」と題するエッセイの中で、明治期の八代海軍大将の書簡について書かれている。

明治23年、「かれがウラジオストックに語学留学していたとき、同地のロシア式暖炉(ペーチカ)に感心し、その構造を広島の知人に書き送っている。」

「八代は明治初年に築地の海軍兵学校に入った。ここで機械を学び、海洋とか気象といったことにちなむ自然科学を学んだ。このことが、同時代の知識人の文学的認識癖からかれを離れさせ、ものごとを写実的にとらえる能力をもたせるにいたっている。

『かれはたかが五尺ばかりの暖炉の構造をのべるにあたって、その前に、広大なシベリアを説き、ややちじめて斜面の多いウラジオストックの地形をのべるのである。この地での多くの家屋の基礎は、斜面を平にすることなく、ななめのまま据えられている、とし、ついで家屋構造におよぶ。その叙述の措辞、表現が当をえていて建築家がこれをよめばそれだけでロシア風民家が建てられそうにさえ思えるほどである。八代は文章表現の上での家屋を建ておえてから、ようやく暖炉の位置、構造にいたる』。

これはまさにペーチカの仕様書そのものではないか。シベリア、ウラジオストック、家屋、と全体を描いてから直接の対象である暖炉の記述がなされる。現代の欧米の仕様書の書き方と同じである。

『散文の持つ一つの機能が、ここではほぼ完全に果たされており、このように、地理学的、もしくは土木建築的な対象をつかみとって読み手に正確につたえる散文は、江戸期においては不完全にしか存在しなかった。それを十分に表現しうる文章が、明治二十年代初期において一海軍軍人の私信のなかで成立しているということに、われわれはおどろかざるをえない』。

明治23年(1890年)、今から110年以上前に、司馬さんが驚くほどの正確な状況レポートを日本語で書ける人もいたわけだ。本人の資質だけでなく、自然科学系の学問とロシア語を学んだことが、このような成果を生むことにおおきな力となったことは容易に想像できる。

当事の兵学校の勉強はほとんどが英語の教科書でなされたであろうから、八代大将の頭の中には、自然に論理的な組み立てが入っていたのだろう。しかし、驚きは、思考の展開だけでなく、それを「日本語文章」で表現できているというところにある。

(*)現物をよんでいないので、司馬さんの受け売りだが、間違いないだろう。

100年以上前に、八代大将がきわめてまれなケースであったにせよ、現代の仕様書の展開様式と同じ流れで、しかも正確に記述されていたのなら、われわれはこの100年間何をしていたのだろう。

進化論風にみれば、退化しているのではないか。まともな「仕様書」が書ける人がどんどん減っている、という観察が正しいとすれば、100年前の八代さんのレベルをわれわれは越えていないことになる。

「建築家がこれを読めばそれだけでロシア風民家が建てられそう」とは、まさに仕様書の文章の極意であり、仕様書においては、図面の援用無しに、文章だけでどれだけ読み手の理解が得られるかが、勝負どころである。

100年以上前に八代さんが書くことができたのだから、われわれが日本語で明確に、論理的に、「仕様書」を記述できないわけがない。それができていなければ、それはひたすら、われわれの怠慢、勉強不足ということになるだろう。(2006/06/30 篠原泰正)

—篠原ブログ(228) 丘浅次郎、あるいは明治期の文章—

司馬遼太郎さんの「この国のかたち」第6巻に言語についての感想という小論がある。その中で興味深い人物が出てくる。丘浅次郎という明治初年に生まれた生物学者がそれである。私は浅学ゆえにこの人のことはまったく知らないが、司馬さんによれば、彼は作文で大学予備門を落第したのだそうだ。

しかし、『丘の文章は、地理の教科書のように事物を明晰にとり出し、叙述も平易である。たとえば「善と悪」(大正14年)という高度な倫理学的主題について生物学の立場から展開した文章などは、述べかたが犀利(さいり)で、論旨が明快なだけでなく…』

丘さんの「落第と退校」(大正15年)という文章から、司馬さんの引用を孫引きすると、『私の考えによれば、作文とは自分の言いたいと思うことを、読む人にわからせるような文章を作る術であるが、私が予備門にいたころの作文はそのようなものではなかった。むしろなるべく多数の人にわからぬような文章を作る術であった』

丘さんが、自分の言いたいことを他人にもわかってもらうように作文したおかげで、落第させられてから120年以上の年月が流れているが、今の世にもまだ「なるべく多くの人にわからないように書く」ことが霞が関やその下部機関に横行していることを彼が知ったら、それこそ仰天するのではないか。

あるいは福沢諭吉のように、自分の文章は猿にさえ読めるように書く、とっていた人からみれば、自分があればほど熱心に進めてきた「学問のすすめ」が結局一部の人々には馬の耳に念仏であったかと、嘆くことになりはしないか。丘さんや福沢さんに、現在の国内の「特許明細書」を見せれば、自分たちがあればほど努力してきたことが生かされていないことを知り、うつ病にでもなってしまうかもしれない。

一つの社会のなかで、明晰な文章と論理的に明快に組み立てられた文書がどのレベルまで流通しているかによって、その社会の「文明」の度合いが測られるとすれば、日本は未だに明治初年のレベルを脱していないのではないかと思いたくなる。

西洋においては、論理的に明快に文章を書けることがエリートの基本条件となっている。日本においては、なるべく読む人がわからないように書くことが、エリートの証(あかし)?となっているらしい。おかしな社会ではある。(2006/08/1706. 8 篠原泰正)

6.世界で通用する、戦える、強い「特許明細書」を作ろう

—詰まるところ知財(IP)戦争とは言語の戦いである。—

私が、これまでお世話になった知財業界では“特許明細書で始まり、特許明細書で終わる”とも言われている。特許明細書とは、発明技術を(ノウハウ、システム、製品等)説明した文書(Documents)技術文書である。

日本では特許明細書と言われているが、英語では「特許仕様書(Patent Specification)」となっている。つまり背景(文化)の異なる人たちにも理解できるように分かりやすく明確に記述する義務と責任を負う極めて重要な書類である。

当たり前だが特許の権利は、言語で請求する(claim)必要がある。発明の現物を示しても誰も認めてくれない。世界の中で唯一の汎用言語は英語である。従って、世界の中で権利を主張するためには、否応なく、英語で行なうことが必要となる。そこでは、単に文法的に正しい英語で記述するというだけでなく、権利を獲得するために、英語のベースとなっている思考方式(ルール)の上で主張する必要がある。そのためには、先ず論理力(思考)を身につけ、記述する 訓練をする必要がある。

では日本で仕様書と呼び慣わされている「Specifications」の原義はなんだろうか。基本語辞典をみると次のように説明されている。

『specify(動詞); state exactly or in detail; 正確にあるいは詳細に述べること、とある。
specification(名詞); a detailed statement of what is wanted or required; 望まれていること、あるいは要求されていることを詳細に述べること、とある。

specific(形容詞); definite, particular, precise; 限定的な、特別な、精密な、というように極めてはっきりとした、他とまぎれないという意味で使われる ことがわかる』。(資料提供: 篠原)

知的財産のグローバル化を唱えるならば「言語」と言う本質的な問題点を避けては通れない。しかし知財関係者の多くは、文書(ドキュメント)に対しての関心が薄いようだ。しかし、日本人でも理解が難しい文章を他国語へ変換(翻訳)することが困難であることに気づいている知財関係者は、少数であるがいる。少数の「心」ある知財関係者は、この事実に対して危機感を抱いてはいることは確かである。しかし業界の慣習に逆

らってまで、社内で改善するには凄いエネルギーを要するので諦めているのが現状かと思う。

日本企業は製品に対する品質保証体制は最大の配慮をして確立してきた。しかし文書に対する品質保証体制は、いまだに確立されていない。中でも訴訟リスクの高い海外への文書に対する品質保証体制の確立を急がないと「知財立国日本」の実現は、絵に描いた餅に終わる。

余談になるが、2013年4月、(一般社団法人)発明推進協会様から、『このままでいいのか日本「特許明細書」』を出版させて頂いた。日本の「特許明細書」は、世界で戦える武器となるのであろうか、という素朴な疑問が出発点であった。

読者の反応は様々であった。特許は「言語のゲーム」と言われるように発明技術の全てを文章で説明するには限界がある、という意見を頂いた。どうやら特許は私ごときの素人が口出しできるような簡単な世界ではないらしい。この書籍は安易な問題提起だけで具体的な解決策が示されておらず、日本の特許明細書を貶めるだけで、実際の仕事には全く役に立たない、という、きつい意見も頂いている。

一方、萎えた気持ちを奮い立たせてくれたご意見も頂いている。「世界で通用する特許明細書を作ろう」という啓蒙活動を諦めることなく続けていく勇気もらった。

『44年間、特許明細書の作文し続けている「S」と申します。IPMAのサイトに掲載されている記事を時々拝見しております。多くの特許明細書が「なぜ難解なのか」という疑問です。ここに書かれていることは、私が考え続けてきたことと同じでした。私は駆け出しのころから、「読んだ人がスラスラと理解してくれる」ことを究極の目的とし、作文技術を勉強して試行錯誤を繰り返してきました。(中略)なかなか私の真似をしてくれる若い人はでてきません』。

この他にも励ましのご意見を頂いている。特許庁の方からも忌憚のない意見を頂いている。「IPMAで指摘されている通り、やはり、意味不明、曖昧文章で書かれた特許出願明細書を読み解く仕事は膨大な過酷な労力を要しており、悩ましい問題である、と」。

特許明細書は「技術文書と法律文書が入り混じった何やら難しく、特殊な文書である」という誤解があるようだ。特許明細書は、技術用語と法律用語を駆使した特殊で難しい書き物である、という誤解は今すぐに解くべきである。

—日本の半導体事業が衰退した、もう一つの理由—

日本のメーカーが世界のDRAM(Dynamic Random Access Memory)市場を席卷していたころ、知り合いになった半導体技術者から、知っていますか？とたずねられたことがある。なぜ日本のメーカーはメモリーチップでは圧倒的勝利を収めても、マイクロプロセッサではインテルやAMDに遠く及ばないのか、そのわけを知っていますか、ということだ。

答えは、日本のメーカーはマイクロプロセッサの仕様書が書けないからだ、であった。彼の話によると、仮にDRAMの設計仕様書が100ページで収まるとすれば、マイクロプロセッサのそれは、その10倍も20倍も、すなわち千ページも二千ページもの仕様書になるとのことだった。この話を実証する能力は私にはないが、およその察しはつく。

メモリーチップの命は書き込みと読み出しの速度である。極めて単純な仕事を命令に忠実に迅速に行なえばOKである。一方、マイクロプロセッサは司令塔であるから、周りのすべての存在に気を配らなければならない。したがって、その関係を一つ一つ規定していけば、書いても、書いても終わらないことになろう。とてもじゃないが、論理力の拙い日本人が乗り出せる世界ではない。(篠原談話から引用)

—ドイツからアメリカへ出した特許登録公報を読んで感じたこと—

ドイツからアメリカへ出した特許登録公報を読むことで「意外」なことに気がついた。ドイツは、ご承知のように職人の技知的財産(ノウハウ)を大切にし、尊重する伝統が守られている。今、日本では技術のオープン(開示)とクローズ(守秘)というのが流行っている。これは、外へ出すか(出願する)出さないか(出願しない)の選択である。

「意外」というのは、全ての技術を開示せずに、隠すところは隠しながらも(意図的?) 妙に納得させられる特許登録公報になっていることである。開示するところは抜かりなく明確に開示し、隠したいところはサラリと尤もらしく書く。このバランスは、実に巧妙で、しかもロジカルになっているから審査官も思わず「うん、うん」と納得するのであろう。さすが、文書作りのプロ技である。これが日本であれば、開示すべきところまで訳の分からない、全てを隠した曖昧文書になるのであろう。(篠原レポートから引用)

—知財関係者の方へ、これだけは言い残しておきたい—

しつこくて申し訳ないが、特許明細書は「発明技術の説明書」である。技術の説明には「文才」は要らない。誰もが理解できる文章で書く。他言語に変換することを意識して書く。先ず、その「心」が必要である。

特許明細書は、背景(文化)の異なる人たちにも理解できるように分かりやすく明確に記述する義務と責任を負う。そのためには論理力(思考)を身につけ、記述する訓練をする必要がある。

詰まるところIP(知財)戦争とは言語の戦争である。国際社会で使われる言語は英語である。日本にとって、これほど不利な条件で戦わなければならない例は、歴史上一度もなかった。製品の品質や価格で勝負するのは違う舞台で戦わなければならないのである。そのためには、グローバル世界で活躍が出来る、英語にも強く、世界から情報を収集し、分析もできる「知財人材」を早く育成(*)することが望まれる。

特許仕様書(Patent Specification)は、発明技術を言語で表現したものに対して、その権利が与えられる。文明である技術を言語で権利主張するための「請求項」も規則に従って文明である英語で明確に記述するしかない。

世界の中で、ほんの少数しか理解できない日本語で表現されていれば普遍性は得られない。つまり普遍的な権利主張はできないことになる。この現実、英語を母語とする人々は圧倒的に有利であり、英語と同じ言語体系の西欧の人々は、まだしも、全く体系(言語構造)の異なる日本語を母語としている我々日本人は、極端なまでに不利な条件を強いられていることになる。

(*)これまで知的財部門で外国関連の仕事をするには、英語ができる人が担当条件であった。“知財の仕事が好きだ”という要素は、第一条件ではなかった。しかし翻訳ソフトの進歩で、英語ができる人、という第一条件は下がる。これからは“知財の仕事が好きだ”が第一条件となる。「AI翻訳」の支援を受けながらグローバル知財で活躍ができる「知財マン」になれる時代になっている。

◆「関連新聞情報紹介」: 誰もが英語“使える”ツール登場は、こちらから

https://www.ipma-japan.org/chizai-AIhonyaku/00_hajimeni_kiji02.html